



現場に根ざす実践知の拠点として—— 山口大学教職大学院 10 周年に寄せて

教職員支援機構山口大学センター センター長 和泉 研二



山口大学教職大学院は、平成 25 年度末に準備を開始し、平成 27 年に設置認可を受けました。平成 31 年度からは現在の体制で本格的にスタートし、制度開始から 10 年という節目を迎えています。これまでの歩みを振り返りながら、今後の展望を見つめ直す時期を迎えています。

教職大学院制度は、教員養成の質を高める国の改革の一環として始まりました。戦後、大学で免許を出す体制は整っていましたが、実践力や専門性に課題があり、1990 年代には教科教育の修士課程が整備され、山口大学でも全教科を対象とした課程が展開されていました。しかし、研究成果が現場に十分活かされていないことや、「理論と実践の乖離」への懸念から、平成 20 年度に教職大学院制度が全国的に導入されました。制度の内容にはばらつきがあったため、平成 25 年に文部科学省が「各都道府県に 1 校」の方針を打ち出し、山口大学では文科省や山口県と連携して準備を開始、30 回の準備委員会を経て平成 27 年に認可され、平成 31 年度から本格的に稼働しました。

本教職大学院の特長の一つは、「やりたいことが実現できる学びの場」であることです。学生は自らの課題や地域の課題を深掘りし、専門性を高めることができます。また、「現場に出る前のスキルアップの場」としての役割も重要です。学部教育では授業時間や内容が縮小する中、実践力をしっかりと育む機会となっています。「理論と実践の往還」を実現する場として、今もその価値は大きいと考えます。

教育界では、「質の向上」から「免許取得の効率化」へと流れが変化していますが、「課題は現場にある」という原点は変わりません。山口大学教職大学院では、現場拠点校方式を活かし、地域と連携した実践知の育成に力を入れています。修了生は山口県内外で活躍し、県内では各学校の即戦力として、また指導主事や管理職という立場でその力が活かされています。

これまでの 10 年で積み重ねてきた成果をもとに、これからも「現場に根ざす学び」の場として、進化を続けます。

教職大学院の学びを ちょっと 紹介

教職大学院では、院生主体による「自主勉強会」を開いています。今年度の第 1 回目が 7 月 11 日（金）に開かれました。「創立 10 周年 今、3 コース協働の強みをいかすために」というテーマで協議を行いました。この他にも木曜日に 3 コースで一緒に昼食の時間を過ごす「ランチミーティング」があります。3 コースが共に学ぶ意義を考え、コースを越えて交流する機会を大切にしています。



「山口大学教職大学院 10 周年記念座談会」

テーマ:教職大学院で育まれたもの ― 理論と実践の往還を見つめて

教育実践コース10期生の「他コースの院生や先生方と教職大学院のことについて話をしてみたい」という希望から、今回座談会の場を設定した。各コースを代表して、3人の先生にご参加いただいた。様子を撮影し忘れるくらい、話に夢中になった座談会の内容をレポートする。 ※先生方のお写真は、後日、撮影。



(左:静屋 智 教授/学校経営コース) (左:鷹岡 亮 教授/教育実践開発コース) (宮木 秀雄 准教授/特別支援教育コース)

1. 創設期の挑戦と設計思想(静屋 智 教授/学校経営コース)

教職大学院の開設初期において、シラバス作成の際、実務家教員として基準の不明確さに直面し、試行錯誤を重ねました。修士課程との統合を背景に、学校経営コースの創設は他大学に先駆けた挑戦であり、制度設計においては柔軟性と先進性が求められました。

2. 教職大学院の授業設計における学び合いの文化(まとめ)

学校経営コース	学校経営コースもだが、教職大学院は、異なる専門性を持つ教員の協働によって、授業の設計が深化し、内容と方法の両面で質の向上が図られている。
教育実践開発コース	教育実践開発コースは、実践的指導力の育成に重点をおき、具体的に AP、DP を意識して、多様なカテゴリーで実践的指導力を理解できるよう配慮されている。
特別支援教育コース	特別支援コースは、少人数制の利点を活かし、対話的かつアウトプット重視の授業を展開することとともに、特色とする実務家教員との協働による学びが展開されている。

3. コース間の相互補完性と特色(まとめ)

学校経営コース	学校経営コースは、組織マネジメントなどの抽象的概念を具体的な教育課題に結びつけ、言語化する力の育成を重視している。こうした整理力は、特別支援教育コースが提示する「子ども観・教育観の再構築」と結びつくことで、より現場に根ざした実践的な組織マネジメントへと発展する。
教育実践開発コース	教育実践開発コースは、理論と実践の行き来を重視し、若手リーダー育成を視野に ICT を戦略的に活用している。ICT 活用による学びの可視化は、学校経営コースの組織マネジメントや、特支コースの個別支援計画とも連動し得る。
特別支援教育コース	特別支援教育コースは、子ども一人ひとりに向き合う実践を通じ、既存の教育観を問い直す視点を提供している。他コースの院生にとっても、特支的視点を取り入れることは、授業設計や学校経営を多面的に捉える契機となる。

4. 制度設計の再構成と未来展望

静屋 教授

教職大学院の制度設計を再構成するにあたって重要なのは、3つのコースそれぞれの専門性を尊重しつつも、「教職大学院として何を醸成すべきか」という共通の理念を共有することです。その中心的な役割を担うのが、学校組織運営や教育マネジメントに主軸を置く学校経営コースであり、その意義と責任は非常に大きいです。経営コースで重視されている「組織マネジメント」の概念は、単に抽象的に理解するだけでなく、現実の教育課題と結びつけて、具体的な言葉で再構成する力が求められます。

鷹岡 教授

教職大学院での2年間の学びでは、「真摯に学び続けられるか」「多様な視点や経験を通して自らの学びを深めているか」が問われます。学びの過程では、教職大学院が学部教育と何が異なるのか、なぜ自分は教職大学院で学んでいるのかという本質的な問いを自らに投げかけ、その意味を言語化できることが重要です。

実践開発コースが重視している「実践的指導力」は、すべての教員に共通して求められる資質であり、年齢や経験に関係なく、本質的に問い直す姿勢が求められます。また、採用試験などの対外的な場面では、自分なりの答えを瞬時に語れるよう、日頃から思考を整理しておくことが大切です。

特に、アドミッション・ポリシー（AP）に照らして、自分自身の学びがその理念とどのようにつながっているのかを意識し、整理しておくことは、教職大学院での学修成果を社会的に説明可能な形にするうえで欠かせません。

宮木 准教授

3コース合同による授業設計の機会を拡充することが必要です。今後は、他のコースに所属する院生に対しても、特別支援教育の現場に触れ、当事者性をもって考察する機会を提供することが求められます。教育のあらゆる場面において特別支援の視点を活かすことができれば、より多様で包摂的な学びの環境づくりが実現されていくでしょう。

5. 総括

創設から10年を迎え、山口大学教職大学院は「理論と実践の往還」を核とし、多様な専門性の融合、ICTの活用、そして個別支援の視点を重ね合わせた教育文化を醸成してきました。今後も、「自ら問い、共に学び合う教育共同体」としてのさらなる深化が期待されます。

山口大学教職大学院が10周年を迎えるにあたり、設立当時の準備の様子を懐かしむ中で、笑みがこぼれる場面や、鋭いまなざしで熱い思いを語られる場面があった。やりがいや苦勞、挑戦、そして院生への期待が随所に感じられ有意義な座談会となった。

創立10周年 あなたの学校・職場・ご家族・お知り合いに…もっと

知ってほしい！ 山大教職大学院

- ①山口大学教職大学院ニューズレター“学燈”をぜひご周知ください。
【バックナンバー】は、こちらの二次元コード、または「山大学燈」で検索を。



- ②山口大学教職大学院のオンデマンド説明会を実施しています。
職場や研修会に大学院生が出向き、教職大学院について説明させていただきます。お気軽にご相談ください。
【申し込みはこちら】 <https://forms.gle/MiCxumP5S3Qpmyqh9>

